

大阪大谷大学

令和六年度 入学試験問題（一般・前期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で八ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の小説を読んで、後の問に答えよ。なお、「小市（のちの紫式部）」と「御許丸（のちの和泉式部）」とは長年の友人同士である（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

小さいころから表現が大げさで、ヤクソクaの時刻にほんのわずか遅れても、

「待ちこがれて、気が変になりそうだったわ」

と、じれてみせる。□ X、たくさん友人を持っているくせに、

「わたしの仲よしは小市さんだけよ。心から語り合える相手が一人もいないなんて、可哀そうだと思わない？」
などと同情をひく癖もある。

言動に表裏がなく、はじめのきっぱりした潔癖性しよの小市が、御許丸の嘘やいいかげんさを許せたのは、どこまでも相手がむじやきで、たとえ嘘をつくにしろその嘘のうしろに、邪悪な毒も、為にする底意もを、感じ取れないからであった。

言葉と実際とがちがったり、前に言ったことと次に言ったことがソウイbしたりするのはしよっちゅうだが、御許丸にすればそのどちらもが本気なのだから、承知①していつく嘘よりかえって始末が悪いかもしれない。□ Y 嘘と本当、現実と非現実のあいだを自在に浮遊うゆうして、さして罪悪感など持とうとしない奔放さは、まったく小市には欠けた資質だった。

時に眉をひそめながらも、そんな御許丸がうらやましく、②

③（わたしはこせこせと、ささいなことにこだわりすぎる。御許丸さんみたいに思うまま心を解き放てたら、人間や自然に対する眼も、かえって展ひらけてくるのではないか）

自己批判めいた感情まで、つい小市は抱いてしまう。

□ Z、詠みっぱなしのまま、ほとんど推敲すいこうの跡さえない御許丸の歌に、天成の才が看取できるからであった。心に泛たかぶまますぐ筆をとって、ソツキョウcにしたためたらしいのに、やがての開華がどれほどみごとなものか推しはかれる底力を、もう今から備えている。

I

気持が、小市は暗くならざるをえない。見たこと感じたことを、三十一文字にまとめあげる技倆りょうはあるのだが、言い回しの細部を気にしてあれこれいじっているうちに、

「詠もう」

と意欲した最初の感動が薄れ、結果的にはいつもいつも、妙に理の勝った、作りものめいた凡作に墮おしてしまふのである。

「わが家は詩歌の家すじ……。せめて生きた証あかしを、その伝統の中で輝かしたい」

そんな望みを抑えかねていただけに、才能④のケツジdヨをみずから認めるのは辛つらかった。

II

自身を、小市は鼓舞する。フンシユツする泉eに似た天分……。御許丸が生まれながらそれを持っているなら、自分の内部にも、渴かれることのない泉があると信じよう。

(信じて、詠みつづけるほかないではないか)

八方塞ふさまがりの息ぐるしさの中で、やっと思つつけかけたたった一つの出口なのに、それさえ行き止まりというのでは、われながらあまりにみじめすぎた。

小市の、^⑤そんな感情におかまいなく、先の便りからいくらかもたためうちに御許丸はまた、雑色ぞうしきに手紙を持たせてきた。つき合い方にむらがあり、小一年も音信不通をつづけるかと思うと、いきなり筆まめになって三日にあげず便りをよこしたりするので、小市もかくべつ驚かずに、早咲きの紅梅に結びつけた薄様うすようを花を散らさないよう用心しながら開いてみた。

(杉本苑子『散華 紫式部の生涯』による)

わが家は詩歌の家すじ……。紫式部の生まれた家は、著名な歌人を輩出している。

雑色……。雑役に従事する下男。

薄様……薄手の紙。

問一 二重傍線部 a ㄱ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

X

 ・

Y

 ・

Z

 に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（ただし、同じ記号は二度使えない）。

- ア それというのも イ ところで ウ あるいは エ さて オ しかし

問三 傍線部①「承知してつく嘘よりかえって始末が悪いかもしれない」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 他者を意図的に騙す用意周到な嘘であるため、素直に信じる他者を巧みに騙すことになるから。
イ 折々の感情を素直に表現したものであるため、たとえ嘘の場合もそこに真実が宿っているから。
ウ 他者を意図的に騙す用意周到な嘘であるため、嘘をついた本人も真実と思いついてしまうから。
エ 折々の感情を巧みに表現したものであるため、嘘をついた本人も真実と思いついてしまうから。

問四 傍線部②「そんな御許丸がうらやましく」とあるが、小市は御許丸のどんな点をうらやましいと感じているのか。本文中の語句を用いて四十字以内で説明せよ。

問五 傍線部③「わたしはこせこせと、ささいなことにこだわりすぎる」とあるが、小市のこの性格が具体的に示された部分として最も適当な箇所を本文中から二十二字で抜き出し、最初と最後の三文字を答えよ。

問六 空欄

I

 ・

II

 に入る小市の心情の推移を、次のア～ウの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

ア (まだ、わからない)

イ (わかる人だけに、伝わればいい……)

ウ (そこへゆくとわたしは……)

問七 傍線部④「才能」を比喩的に言いかえた部分を、十文字以内で抜き出して答えよ。

問八 傍線部⑤「そんな感情」とあるが、次のア～エのそれぞれについて、小市の抱いた「感情」に含まれているものには○、含まれていないものには×で答えよ。

ア 御許丸の歌の圧倒的な完成度の高さへの嫉妬や深刻な敗北感。

イ 家風による強い重圧の自覚と、新たな世界への旅立ちの予感。

ウ 自身の可能性を信じることへの疑心や不安、将来への閉塞感。

エ 和歌詠作により、この世に自らの生の跡を刻むことへの期待。

□ 次の文章は源俊頼の『俊頼髓脳』に記された能因法師に関する説話である。これを読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

能因法師は、歌をも、うがひして申し、草子などをも、手洗ひて取りもひろげける。^①ただ、うちするかと思ひけれど、讃岐の前司兼房と申しし人の、能因を、車のしりに乗せて、ものへまかりけるに、二条と、東の洞院とは、伊勢が家にてありけるに、子の日の小松のありけるを、さきを結びて植ゑたりけるが、生ひつきて、まことに大きなる、松にてありしが、木末の見えければ、車のしりより、^②まどひおりければ、兼房の君、心も得ず、「いかなる事ぞ」と尋ねければ、「この松の木は、高名の伊勢が結び松には候はずや。それが松をば、^③いかでか、車に乗りながらは過ぎ侍らむ」といひて、はるかに歩みのきて、木松の隠るる程になりてこそ、車には乗れりける。

また、右近の大夫国行と申しける歌よみの、陸奥の国に下りけるに、歌よみ集まりて、餞しけるに、^④「白河の関過ぎむ日は、水鬢かき、うち衣など着て過ぎよ」と教へければ、「いかなれば、さはすべきぞ。国の人の、集まりて見るか」と問ひければ、「いかでか、能因法師、（A）『都をば霞とともに立ちし^dかど秋風ぞ吹く白河の関』と詠みたらむ関にては、けなりとて、鬢ふくだめては過ぎ給はむ」と言ひければ、^e人々笑ひけりや。さりとも、「この道を好まむとおぼさば、^fさようにしてぞ、歌は詠まれ給はむ」とぞ申しける。されば、^⑤この道を好まむ人は、世の末なりとも、かしこまるべきなめり。

能因法師・讃岐の前司兼房・伊勢・右近の大夫国行……いずれも平安期の歌人。

餞……旅に出る人を送別する宴席。

水鬢かき……「鬢」は、頭の側面の頭髮。ここでは、乱れた頭髮を水で濡らして整える様子。

うち衣……表面を打ちつやを出した衣。ここでは、整えた晴れ着。
けなり……私用の旅。

問一 二重傍線部「子」の読み仮名を平仮名一文字で記せ。

問二 波線部 a ～ d についての文法的説明として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア a、b は過去の助動詞・c はサ行変格活用動詞・d は接続助詞
- イ a、b は過去の助動詞・c はサ行四段活用動詞・d は副詞
- ウ a、b、d は過去の助動詞・c はサ行変格活用動詞
- エ a、b、d は過去の助動詞・c はサ行四段活用動詞

問三 次の文章は、波線部 e、f の説明文である。空欄 i～iv を補うのに最も適当なものを、ア～カの中からそれぞれ一つ選び記号で答えよ。

接続助詞の「ば」は、波線部 e のように活用語の i 形に接続する場合、順接の ii 条件を表す。また、波線部 f のように活用語の iii 形に接続する場合は、順接の iv 条件を表す。

ア 未然 イ 連用 ウ 已然 エ 仮定 オ 比較 カ 確定

問四 傍線部①「ただ、うちするか」、②「まどひおりければ」の意味として、最も適当なものを、それぞれ、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|---|------------------|---|--------------|
| ① | ア 単に、思い出してしているのか | ② | ア あわてて下りたので |
| | イ 単に、思いつきでしているのか | | イ 心惹かれて下りたので |
| | ウ 単に、思いつめてしているのか | | ウ 驚くように下りたので |
| | エ 単に、思いやりでしているのか | | エ 困惑して下りたので |

問五 傍線部③「いかでか、車に乗りながらは過ぎ侍らむ」を現代語訳せよ。

問六 傍線部④「白河の関」のように、古歌に詠み込まれた各地の名所を示す語を、漢字二文字で答えよ。

問七 (A)に引用された能因法師の和歌には、掛詞が用いられている。その単語を、抜き出して記せ。

問八 傍線部⑤「問ひければ」と右近の大夫国行が問いかけたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 能因法師が、白河の関を通過する際に、どのような衣装を身につけていたのかを知りたかったから。
- イ 右近の大夫国行が、白河の関を通過する際に、国の人が集って見ることの理由を知りたかったから。
- ウ 白河の関を通過する際に、衣装を整える必要性を、宴席の同席者が説いた理由を知りたかったから。
- エ 宴席に参加している歌よみたちが、白河の関を通過する際に、身につける衣装を知りたかったから。

問九 傍線部⑥「この道を好まむ人」とは、どのような人か。十字以内で説明せよ。

問十 伊勢が作歌活動をした西暦九〇〇年頃に成立した勅撰和歌集を、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 万葉集
- イ 古今集
- ウ 後撰集
- エ 拾遺集
- オ 新古今集